

アマチュア演奏のすすめ

大阪大学名誉教授

甲斐 泰

1. はじめに

大阪大学室内楽アンサンブルという演奏グループをご存知でしょうか。Osaka University Chamber Ensemble を省略して OUCE と呼んでいます。大阪大学の支援を頂いて2005年4月に発足し、今年で11年目を迎える大阪大学教職員・院生の室内楽団です。今年5月3日に記念すべき第20回定期演奏会を迎えることになりました。昨年秋の第19回演奏会の際、名誉教授の園田昇先生、原茂太先生におすすめ頂いて、本誌に拙稿を寄稿させていただきました。

楽器を演奏することは簡単なことではありません。演奏する本人がそれらしい音を出せたと思えるようになるだけでも、長い時間と練習の積み重ねが必要です。アマチュア演奏者が練習に使える時間やエネルギーは限られており、その中から成果を発表していかねばなりません。何を好き好んでそんなしんどいことをしているのだろう、と思う人も多いことでしょう。しかし、世の中にはアマチュアのオーケストラや室内楽団がごまんとあり、多くの愛好者がそれを聴くために演奏会場まで足を運んでいます。どうしてでしょうか。演奏する側にも、それを聴く側にもそれぞれに理由があるようです。

最初に、演奏する側の立場について考えてみたいと思います。

2. アマチュア演奏について

楽器にもいろいろなものがありますが、音を出す仕組みが簡単な楽器といえば、打楽器でしょうか。中でも簡単なクラベスは、ポピュラー音楽などでよく使われるもので、2本の木の棒を打ち合わせて音を出します。音自体は簡単にですが、演奏が簡単かというところではありません。曲の進行の要所で正確なリズムを刻み、曲をリードすることが求められますので、リズム感の悪い人がこれを手にすると演奏がぶち壊し

になってしまいます。クラシック音楽の演奏に欠かせないティンパニーは太鼓の一種ではありますが、音程を演奏することができるため、高度な技術が必要とされています。

弦楽器も構造は簡単です。皆さん良くご存知のバイオリンを例にとって説明しましょう。主な構成要素は、ボディ、弦、弓の3つです。それに付随して、弦の振動をボディに伝えるための駒と弦を張るための糸巻き、弦を指で押さえつける指板ぐらいです。弦を押さえる位置を変えると振動の起点が変わり音が変わる、といういたってシンプルな構造になっています。

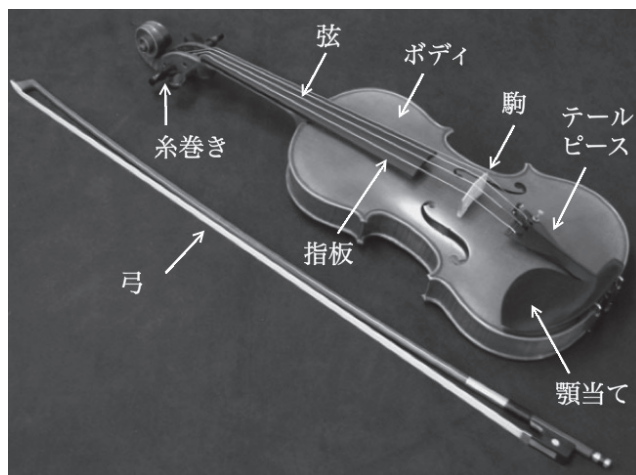


図1. バイオリンの構造

管楽器の中の金管楽器は、トランペットやトロンボーンに代表されるもので、演奏者の唇の振動を管に伝えて音を出します。一方、木管楽器は、振動の主体が唇ではなくリードと呼ばれる木や竹などの薄い板に変わります。

ピアノは、強く張った金属線をハンマーで叩いて音を出すもので、楽器の中では最も広い音域をカバーしています。

どのような楽器を演奏する場合でも、演奏者は楽器と一体になることが求められます。管楽器の場合は、奏者の息遣いそのまま音につながりますし、弦楽器

やピアノなどでも、奏者の息遣いや体の動きが弓や指先を通して楽器に伝わるという点では変わることはありません。楽器の演奏は、奏者のエネルギーを楽器に伝える操作ということができますので、演奏者の体は楽器の一部といってもいいでしょう。その意味ではスポーツ選手と変わることはありません。スポーツ選手が、種目によってそれに適した体が変わっていくのと同じように、楽器の奏者にもそれぞれの楽器に応じた肉体改造が必要となります。楽器の演奏に適した肉体は、楽器の演奏を通してしか獲得することはできません。自ずと、集中した継続的な努力が求められますし、ともかく時間がかかります。

物心が付いた時にはバイオリンが弾けるようになっていた、という人のことは私には分かりませんが、いい歳をしたものが楽器と付き合い始めるには、それなりに積極的な理由があるに違いありません。

先人の音楽に対する考えは楽譜という形で現代に残されています。外国語で書かれた本を読もうとする場合その国の言葉を学ばなければならないのと同じように、楽譜の表すことを知るためにはそれを演奏してみなければなりません。もちろん、現代はCDという「音源」がありますので、それを聴くことによって先人の考えを知ることはできます。CDはプロの演奏ですから、どれも素晴らしいものではありますが、聴く人によって一方の演奏が他方より良いと思うのは当然ですし、同じ曲でも心の底から感動する演奏もあれば、あまり共感できない演奏もあります。そのような音楽に接している中で、このような素晴らしい演奏に自分も参加できないだろうかと思う人がいても不思議ではありません。世の中にはそんな人がたくさんいます。ともかく自分で音を出してみたい、ということから始めて、1フレーズでもいいからCDで聴くような音楽を演奏してみたい、というように夢は広がっていき、ある程度の基礎練習を積み重ねると、どうしても他の誰かと一緒に演奏してみたいと思うようになります。他の人と一緒に演奏することは、一人で演奏していた時とは全く違う難しさがあり、最初は他の人に合わせて演奏することが出来ません。自分の音を出すのに精一杯で、周りの音がほとんど耳に入っていないからです。周りの演奏者に合わせて演奏する、という演奏の一番の基本ができるようになるのに、また長い

時間と懸命の努力が必要になります。そしてある日、感動的な時が訪れます。音楽の女神が微笑んでくれる瞬間です。自分の音が周りの人の音とぴったり合っ、何とも言えないハーモニーが醸し出されるのです。その瞬間を一度経験してしまうと、もうすっかりその虜になってしまいます。



写真 1. ハイドン ピアノ三重奏曲 ト長調 Hob.XV:25
第 18 回 OUCE 定期演奏会にて (2014.5.4)
Vn; 小林真紀さん (医学部附属病院医員)
Pf; 吉田亜紀さん (情報科学研究科事務補佐員) Vc; 筆者

もちろん、音楽の魅力はハーモニーだけではありません。曲の流れに沿って、個性の違う様々な楽器がそれぞれ自己主張しながら会話し続けるところが一番面白いところでもあります。最初は自信がもてないので、会話も遠慮がちです。やがて自分の言いたいことははっきりし、相手の言うことも聞き取れるようになってくると、自信を持ってその会話に参加できるようになります。曲の大きな流れの中に身を任せて演奏することができるようになると最高なのですが、実際のところそう簡単にはいきません。

英語で書かれた本を翻訳で読んで、名作は名作、読む人に感動を与えることはできます。しかし、もし自分で英語の原本を読んでみたらどうでしょうか。翻訳で読んでいた時とは全く違う新しい世界が開けることを、誰もが実感することが出来ます。翻訳を読むのも良い、でも原作を読むのはもっと良い、例え辞書を片手のまだるっこしいものであっても。

長々と書いてしまいましたが、自分の下手な演奏を省みることもなく、むしろそれは強く自覚しながらも、めげることなく演奏し続ける側の立場はこんなものではないでしょうか。

3. 生音（なまおと）の魅力

では、なぜそんなアマチュア演奏をわざわざ会場まで聴きに行く人がたくさんいるのでしょうか。アマチュアのオーケストラや室内楽団の演奏を聴きに行く人の多くは、出演者の関係者です。このあたりは、小学校の学芸会（今では学習発表会？）の延長です。出演者が少し歳を取っているだけです。出演者から親戚一同に案内が回り、友人一同にも職場関係者にも案内が回りますので、日頃コンサートに縁のない方でもちょっと行ってみようか、ということになります。アマチュアの演奏グループが最も大切にしないとイケないお客様です。

また、アマチュア演奏に関心を持って聴きに來られる方も結構おられます。このような方はリピーターになっていただけますし、そんな方がアンケートに書かれた辛口批評が、演奏者にとって大きな財産となります。演奏に失敗したとき、演奏者にはそれが一番よく分かっていますので、それをズバリと指摘されるのは辛いことですが、それをちゃんと逃さず聴き取っている方が会場におられることは、その後の演奏の励みになります。もちろん、頑張って上手く演奏できたとき、そう書いていただくのも嬉しいことです。でも、ほとんどの演奏では前者のことが多いものです。

私の親しい友人で、学生時代からクラシックギターの演奏を趣味にする人がいます。ありがたいことに、都合がつく限り OUCE の定期演奏会に来ていただけるのですが、その彼曰く、「とにかく生音は良い。ステージで演奏される楽器から直接響いてくる音はなんとも気持ちが良い」と言います。「あまり気持ちがいいのでついウトウトしてしまうこともあるが、それは演奏が退屈だからではないので気を悪くしないように」と言います。もっとも、ステージで演奏する私には、彼のそんな様子を伺う余裕など全くないのですが。

4. 大阪大学室内楽アンサンブル(OUCE)の立ち上げ

大学には沢山のクラブがあり、新生が大学に出てくる頃には部員獲得合戦が盛んです。クラブには部室が与えられ、活動費の一部が大学から補助されています。これは、クラブ活動が学生の課外活動として推奨されているからで、大学にある文化活動やスポーツ活動のための施設もほとんどがクラブ活動優先で使われ

ています。そのため、教職員や大学院生が、週末にテニスをしたいと思ってコートを予約しに行っても、予約ノートはクラブ活動のため既にびっしり埋まっている、というのが普通です。音楽演奏といった文化活動に至っては、施設そのものが皆無と言ってもいいでしょう。

まず、OUCE が設立されたきっかけについてお話ししましょう。日本の化学関係の研究者や技術者は日本化学会という組織に所属して、学会活動を行っています。その日本化学会が創立 125 周年を迎えることになり、平成 15 年（2003 年）3 月、天皇皇后両陛下のご臨席を仰ぎ、春季年会会場の早稲田大学で盛大な祝賀式典が挙行されました。この時、日本化学会会員によるオーケストラを編成し祝賀に華を添えたいという動きが生まれました。日本化学会には 4 万人近い会員がいますので、楽器の演奏を趣味とする会員も多く、学会会員のみによるオーケストラという世界でも類を見ない演奏グループが編成され、日本化学会館で練習を積みました。化学会年会の懇親会は、学習院大学理学部化学科のご卒業で、長く日本化学会会員であられる常陸宮殿下御夫妻をお迎えして盛大に開催され、その場で化学オーケストラが演奏するという晴舞台をいただきました。

次の年の化学会春季年会は関西学院大学で開催されました。化学オーケストラの演奏は継続してやりたいということになり、私を取りまとめをすることになりました。その頃の私は、チェロを手にしてはいたましたが、とても満足に弾けるというレベルではありませんでした。しかし、とにかくお世話をすることになり、関西の大学・企業を中心にメンバーを集めることになりました。幸い、大阪大学・大阪府立大学・関西学院大学などの大学と藤沢薬品工業（現アステラス製薬）からまとまった参加者を得ることができました。

練習をどこでするかということになった時、大学にはそのような場所がありません。いろいろ探した末、工学部の学生食堂を日曜日に使わせてもらえることがわかりました。早めに利用申請書を出して許可が得られると利用できるのですが、日曜日は学生食堂が営業していませんので、おおむね希望の日に練習会を開くことができました。オーケストラ規模の練習会の場合、学生食堂を使わせてもらったことは、非常に助か



写真2. 工学部学生食堂での演奏風景（2005年夏）

りました。

平成16年（2004年）3月、無事化学オーケストラの第2回公演が終了しました。日本化学会春季年会は、2回関東地区で開催し1回関西地区で開催するというサイクルで動いていますので、関西学院大学での演奏の後、次の関西地区での化学オーケストラの演奏は3年後ということになってしまいます。演奏機会がなくなると、演奏グループを維持することはできませんので、有志で話し合って大阪大学室内楽アンサンブルを立ち上げることにしました。幸い大阪大学の支援をいただき、活動の拠点として大阪大学コンベンションセンターMOホールを使わせていただけることになりましたので、平成17年（2005年）4月、10名の発起人でOUCEがスタートしました。その年の秋から年2回の定期演奏会を続けてきて、昨年秋で第19回、今年5月には、記念すべき第20回定期演奏会を開催する運びとなりました。

5. OUCEのミッション

OUCEのミッションとしては大きく二つが挙げられます。一つは大学構成員間のコミュニケーションを推進することにより大学活性化の一助とすることです。音楽を演奏するという立場では、職種職階の別も教職員学生の違いも一切関係がありません。もしそれを演奏に持ち込むと、アンサンブルの編成自体が直ちに崩壊してしまいますので、メンバーは共通の演奏曲に対する対等なパートナー、という意識を全員強く持っています。お互いに努力し協力して自分たちの音楽を作り上げていく中で、自然と連帯感が生まれますし、感動を共有することができます。毎日がともかく忙しい大学構成員にとって、共に演奏することは、お互いが信頼し理解し合う貴重な時間をもたらしてく

れ、またひと時心を癒し明日への力を養うものともなっています。

OUCEのもう一つのミッションは、演奏会を通して少しでも多くの地域の皆さんに大学キャンパスを訪れていただき、大学を身近に感じていただくことです。かつてタコ足大学と言われた大阪大学も、今では三つのキャンパスに統合され整備も進んでいます。初めて大阪大学にこられた方は一様に、その規模の雄大さとモダンな建物群に圧倒されます。そんな中で多くの大学構成員がエネルギーを集約し知恵を絞って活動していることを、肌で感じていただきたいと思えます。最近では、大学もその活動を外部へ発信する仕組みを整備し、積極的に活動しています。OUCEの活動がその一助になればと考えています。

6. おわりに

OUCEは、大阪大学教職員・院生による室内楽団で、全国でも類を見ない演奏グループです。それを10年間続けていくことができました。活動基盤を頂いた大阪大学の支援があって初めて可能になったことではありますが、私たちの演奏を聴きにきていただいた学内外の音楽を愛する皆さんの支えなくしては考えられません。また、日常の活動は多くの熱心なメンバーによって支えられてきました。これからも引き続き活動していくことができれば、この上ない幸せです。

10年間活動してきて一番思ったことは、大学内に室内楽の練習場所がないということでした。ピアノと10名程度がのれる低めのステージと50脚程度の椅子を並べられる小さな音楽サロンがあれば、大学教職員・院生が仕事が終わったあと、ちょっと集まって練習することができますし、室内楽に限らず色々な演奏に活用することができます。関係諸兄に是非お考えいただければと願っております。

私がチェロを弾きたいと思い、今もそれにこだわっていることには色々経緯もありますが、それは全く個人的な事情によるもので、ここでお話するようなことでもありません。ただ、楽器の演奏という大変難しく思えることでも、やろうという強い気持ちさえあれば、年齢には関係なく始められると思います。練習すれば必ず成果はありますし、それを積み上げていくと、大きな成果につなげることができます。

“NEVER TOO LATE”

皆さんも一緒に OUCE で演奏しませんか。OB の方も歓迎です。

7. お知らせ

5月3日(日)、大阪大学コンベンションセンター MO ホールで午後2時から、OUCE の第20回定期演

奏会を開催します。記念すべきこの演奏会を盛り上げるため、メンバー一同張り切って練習しています。

皆様に親しまれた曲もいろいろ用意しておりますので、大学を散策かたがた、是非ご来場下さい。

(応化 昭和42年卒 44年修士 48年論文博士)



写真3. 第19回定期演奏会集合写真 (2014.10.26)



OUCE

Osaka University Chamber Ensemble

大阪大学室内楽アンサンブル 第20回演奏会

2015年5月3日(日)

13:30 開場 14:00 開演

大阪大学コンベンションセンター MO ホール

ミヒャエル・ハイドン
ブラームス
ダマーズ
ラヴェル
シューマン
シューマン
ブラームス
グリーク

ディヴェルティメント ハ長調 NH27 第1楽章～第4楽章
クラリネット五重奏曲 短調 Op.115 第1楽章
四重奏曲～ランゾン・ウィルソンに
ラ・ヴァルス
ピアノ五重奏曲 変ホ長調 Op.44 第1楽章
ピアノ五重奏曲 変ホ長調 Op.44 第3,4楽章
ハンガリー舞曲第6番
ペール・ギュントより 朝、アニトラの踊り、山の魔王の宮殿

お問い合わせ： 甲斐： yasushi.kai@osaka.zaq.jp 四宮： shinomiya@chem.eng.osaka-u.ac.jp

URL <http://orchestra.musicinfo.co.jp/~ouce/index.html>

※当ホームページは、クラシック音楽情報センター(<http://www.musicinfo.com>)より、サーバーの無償提供を受けています。

